

観光NPO法人と観光学部学生の「社会学連携」

社会人と立教大生のランデヴーは、「観光立国」にどう寄与出来るか？

会員 近藤 節夫

一、NPO法人と学生有志の同志的連携

昨年一二月、立教大学観光学部部の七〇名からなる有志学生の組織が、私が所属するNPO法人、「JAPAN NOW観光情報協会」（東京都渋谷区代々木一―五八―一三小田急代々木ビル3F、以下「JN協会」）の「立教支部」として設立・承認された。

「産学協働（同）」が広く奨励され、その言葉が普遍化して、研究機関である理工系大学がその研究成果の技術とノウハウを、企業に商品生産を委ねる形で脚光を浴びたのは、もうかなり前のことになる。

近年医科系大学の研究成果を、評価し賛同したベンチャー企業が資金面でサポートし、資金集めのために「ジャスダック」、「マザーズ」のような株式市場に上場する新しいケースも現われ、証券業界でも注目を集めている。

また、ここ数年地域社会と大学が従来とは異なった形で、ジョイントするケースも目立ってきた。その中には少子化等の影響で衰退しつつある地域の大学が、自治体の施設を利用しながら公開講座開設等を通して再生の道を模索するものであったり、自治体が地盤沈下した地域の中小企業復活のための処方箋を大学に求めたり、ともに活性化を探るために産学協働を利用するような新しい流れも出てきた。

われわれJN協会が目指しているのは、設立趣旨や行動理念からしてその種の「産学協働」とは、趣を異にしていることは予めお断りしておかなければならない。われわれの「社会学連携」は、社会人と学生が《ボランティア活動のなかでも）に協力して≡活動するということ》を強く意識している。それは、「組織体と組織体の提携」というより、むしろ「人と人のシェイクハンド」と言った方が当てている。この度設立された「立教支部」は、「観光振興」の分野で主体的にNPO活動に取り組んでいるわれわれ社会人と、「観光学」を学んでいる若者が共通の課題を見つけ、それを観光振興の路線上で、わが国の観光活性化のためにもお手伝いしようという素朴な気持ちの下に結成されたものである。そのきっかけは大手旅行会社役員であった、JN協会の理事のひとりが立教大観光学部で「観光学」の教鞭をとっていたことから両者連携の媒酌人として根気強く発展させたものであり、第三者の思惑的な介入や、仲介、サポート等はまったく受けていない。繰り返すが、民間のNPOが、社会の実学的な体験を望んでいた学生たちと、双方の活動の中で手を携えていくという純粋な気持ちがお互いに一致したからに他ならない。

立教大学は一九六七年社会学部の中に観光学科を設置し、それが一九九八年観光学部へ

と発展し、今日では埼玉県新座市に観光学部を有する、わが国唯一の総合大学として斯界でもその存在を高く認められている。

本稿では、われわれJN協会の活動を紹介し、わがNPOと学生有志のランデヴーの経緯、及び国の「観光立国」への取り組みについて述べてみたい。

二、JN協会の行動とJNの提言

われわれのNPO法人・JN協会は、日本の「観光振興」、及び「観光活性化」への取り組みとサポートを大きな目標に掲げてはいるが、外から見るとそのモットーは些か大雑把で表現が幾分抽象的であるために、活動の意味、主旨と実態まではなかなか理解されにくい。そのためJN協会としては抽象的なお題目を唱えるだけでなく、誰が見ても分る具体的な形や、実績を示すことによって「観光振興」への取り組みと活動を世に訴えていきたいと考えている。最近では、NPOとしての中立的な立場と特権を有効に活用し、政府や、地方公共団体へ自分たちの活動をPRして啓蒙し、活動範囲を拡大しようと理事長を始め、会員一人ひとりが地道に働きかけているところである。幸いこの社会学連携については、立教大学当局からも実社会との関わりの実験ステージとして温かいまなざしで見てもらっている。また、旅行業界誌（「週刊トラベルジャーナル」〇四年一月一九日号）にも大きく取り上げられた。

さて、一般社会への大きな広報活動、また観光振興と活性化のための政策の一環として、昨年JN協会が取り組んだ最大のプロジェクトは、観光振興のための国に対する提言である。その提言とは、JR東京駅周辺に「観光総合案内センター（東京センター）」を設置して、東京を訪れた人（外国人、日本人を問わず）なら誰に対しても観光案内の相談に乗ってあげられる、国の公設機関設置の要望である。観光振興のための前線基地としての観光案内所は、ニューヨーク、パリ、ロンドン等世界の大都市では早くからその必要性に迫られ、今日それらの都市の中心街に大規模に設置され、訪れる大方の旅行者の需要と要望に応え、成果を挙げている。旅行者を心から歓迎し、温かくもてなすという「観光の本質」、即ち「観光立国の精神」を斟酌すれば、旅行者が観光の方法、手段、名所・旧跡のような訪問場所等について総合的に尋ねるところもなく、また気持ちよく旅を楽しむための案内、相談にも充分対応してもらえない、公的な案内施設のない現状は、「観光立国」を謳う以上あまりにも無為無策で不親切であると思う。われわれは、その「観光総合案内センター」の構想、アイデア、試案について、例え実現まで曲折はあるにせよ、政府が「観光立国」を宣言した以上、国家百年の計のためにも、せめて首都の中心に公的な観光案内施設を設置するべきであると考えている。

もうひとつの中核的なプロジェクトは、「江戸城再建」である。これについてもJN協会では昨年一月公式に打ち上げ、すでに週刊誌「サンデー毎日」で二度（三月三〇日号、六月一日号）に亘って大きく取り上げられ、コラムニスト・岩見隆夫氏から「江戸城再建」

をただの夢物語にするのは惜しいと好意的に書いてもらった。更に昨年八月東京新聞がカラー版の「江戸城特集」号を発行して、江戸城について詳細に紹介してくれたことは「江戸城再建」の応援歌となり、「江戸城再建」プロジェクトの背中を強く押ししてくれた。

残念ながらも首都東京には、日本を代表するようなランドマーク的観光施設や、日本人自身が誇るに足る名所・旧跡が何ひとつとして見当たらないのが現実である。これは、私自身が永年旅行会社に勤めながら世界各地を訪れるたびに痛感していることでもある。戦災や自然災害で失われたとか、日本家屋は木造で保存性に問題があるとも言われているが、明治維新を経た廃仏毀釈以来、やはり根本的には日本人自身が奥ゆかしい日本文化の美点に気づかず、日本文化を大切に守ろうとせず、切り捨ててしまった結果ではないかと嘆かわしく思っている。

昨年首都東京は江戸開府四〇〇年を迎えたが、江戸の華やかな文化と伝統を象徴するような建造物が、今日私たちの周囲の人目につくところに存在しないのは何と云っても寂しい。その中で江戸八百八町の象徴だった、かつての「江戸城」が往時の規格と環境下に再び聳え建ったなら、これほど夢を掻き立て日本人の誇りを昂揚させるものはあるまい。私たちは、せめて天守閣だけでもいいから昔風に復元された姿をお堀端に見てみたい。否、出来れば欲張って、元禄時代様式に復元された「松の廊下」で歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」の殿中刃傷芝居の一コマも見てみたいとさえ思う。さすれば、日本人としての誇りや、忠誠心、愛国心、奥ゆかしさ、奥深い日本文化の実像、日本的な美点等を感じとり、内的には日本人としての矜持を呼び覚まし、対外的には外国人に対して誇らしい気持ちで、日本の優れた芸術・文化を広く啓蒙しようという気持ちも高揚してくると思う。

確かに「江戸城再建」を実現するためにクリアしなければならないハードルは決して低くはない。建設場所や、建築費用等は本プロジェクトの最大の難関である。特に、天守閣が建てられていた一角は現在宮内庁の管轄下であり、通常の話し合いでは話は簡単には纏まるまい。しかし、われわれがすでに集計したアンケートによれば、各人各様にそれぞれ問題を認識した上で、敢えて「江戸城再建」は圧倒的な支持を得ている。

このような「観光総合案内センター設置」と「江戸城再建」という、ふたつの大掛かりなプロジェクトを世に訴え、その実現を夢見ている。同時に、われわれは堅実に地域の活性化、「まちおこし」に火を灯したいと考え、隔月に観光情報紙を発行しながら観光活性化のためのシンポジウム開催、観光価値の評価に関する研究会、一連の危機管理セミナー、国家的プロジェクト施設見学会等を実施している。今後は、全国的に支部組織を拡大し、支部が地域住民と一体となって「まちおこし」のための知恵を出し、地域の活性化のために活動したり、自治体に対して働きかけ、ボランティアが運営する観光案内センターを設置するような方向に行動を起こしてくれることを期待している。

三、若い力への期待感と「観光学」

われわれが若い学生たちの斬新な発想、創造性、行動力等を評価し、彼らがわれわれの経験、実績、知恵、人脈、老人力等を活用し融合させることによって、新しい観光開発への知恵が生まれ、実行する手段が緒につき、一体となった総合的なアプローチが可能になると思っている。ひとつの形として将来的には、市町村の観光行政への提言を説得力をもって訴えることも出来ると思う。

入学前から「観光」に深い関心を抱き、大学キャンパスで「観光学」を学んでいる学生たちに対して、幸いわれわれNPO法人には、永年「観光」を生業としてきた観光業のプロを始め、観光行政に携わっている人、観光業界の人たちと接点のある人、観光実務に精通しているプロ、セミプロ等人材は多士済済である。学生たちにとってキャンパス外における課外授業や、課外ゼミの分野でもきつとわれわれが役立つことが出来ると思う。

「観光」というのは実学、突き詰めると理論より体験、フィールドワークが重要である。現場感覚が分らなければ、観光の本質を理解することは難しい。永年旅行業の営業現場を体験してきた私自身の実感から言えば、聞きなれない言葉であるが、「臨場学」と呼んでもよいものである。現場において「五感」で感じ取るヴィヴィッドな感覚、「臨場感」を知ることこそが観光業を生業とする者にとっては最も大切なことである。「観光学」なるものは、学問的な範疇ではやや歴史が浅く、まだ学会においてその地歩が確立されているとは言い難い。まだまだ発展途上の専門科目である。「知識」と「現場体験」「フィールドワーク」が一緒になって初めて専門的な学問としての体裁を整えることが出来る。その意味でも観光学部の学生たちが、キャンパスから社会へ出て少しでも観光業に関わる過程で、「臨場感」を五感で知って、真の「観光学」なるものをしっかりと修得して欲しいと願っている。

まだ、支部はスタートしたばかりで成果を云々するまでもないが、成果は学生たちが自分たちの持っているテーマを学習する中で、観光業に携わり「歩いて」「学んで」「まさにこれだ!」「やったあ!」と感じるような充実感と満足感の伴う体験を味わい、レポートとして「発表」出来れば、それが立派な成果ということになるのではないか。更に経験の深い社会人との協働作業の過程で、学生たちに何らかの示唆や刺激を与え、彼らが多面的な視点から、多角的に物事を考えるようになれば一層望ましいと考えている。

四、「観光立国」推進に内包する障害と壁

さて、観光が今日漸く日の目を見て、小泉首相は昨年日本の国策のひとつとして内外に「観光立国」を宣言し、「ビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）」を本格的にスタートさせた。二〇一〇年には訪日外国人客数を現在のほぼ倍増、一千万人を目指す具体的な数値目標も掲げた。私たち観光業をサポートしているこうとする黒衣としては、心強い国家のプロパガンダである。しかし、首相の思惑通り目標を容易に達成出来るかとなると、前途には克服しなければならぬ課題が山積している。私自身四〇年間に亘り観光業界に籍を置きながら、アウトバウンド（海外旅行）を主に、インバウンド（外人旅行）でも実

務を取り扱い悪戦苦闘してきた。その経験上から早急には計算通りの目標達成は難しいだろうと実感している。

私自身旅行業界内で活動しながら強く感じた問題点を、特に三点だけ指摘しておきたい。

① 観光に対する偏見（蔑視）はなくなったか？

日本社会には、過去長らく観光を疎んじるようなわだかまりがあつて、観光全般に対する蔑視的な気持ちが見え隠れしていた。明治政府以来、観光は国家が管掌すべきではないとする意識や考えが最近まで残っていた。わが国には永年に亘り「観光⇨物見遊山⇨遊び⇨浪費」の固定観念が強く、観光業への国家支出予算は雀の涙と言つてよかつた。華やかな国際交流についても、これまで主流であつた海外旅行は、一時期外貨の無駄使いぐらいにしか考えられていなかった。その端的な例が海外旅行者に認められた外貨持ち出し額の変遷史によく現われている。日本の外貨準備高の残高に合わせて朝令暮改の外貨持ち出し制限・緩和が度々繰り返された。国家が経済的に潤えば、海外旅行者の持ち出しを奨励し、厳しくなるを持ち出し額に制限を加えた。大げさに言えば外貨保有額の調整は、一時海外旅行者の持ち出し外貨の制限によつてコントロールされていた。経済活動の停滞が、部分的に海外旅行者に伝わられてきたのである。

明治政府以来わが国は、官僚機構と重厚長大の大企業を優遇する機構と制度の下で、経済的に発展してきた。実質的にいくら働こうと、またいくら稼ごうと恩恵は、その官僚機構と大企業の経営者層に還流される仕組みになつていた。その一方で、余裕のある資金を遊びのために使うことは、消費が、例えばそれを受け取る階層の人々が汗を流して稼いだものであつても、はしたない金でしかなかつた。遊興のために消費する人びとのために働くことは、蔑まれることであつた。これは泥に塗れて働く観光現場の人たちを軽んじる結果にもなつた。かつてわが国は富国強兵を図りながら、伝統的にその礎であり、尖兵である現場を重用していないということを国民の誰もが暗黙裏にわかつていた。一時的に一部の「観光業」は、「水商売」とオーバーラップして受け取られるような時代もあつた。

近年経済が停滞し、失業率も5%台を彷徨い、国家経済は限りなく破綻状態へ近づいている。いま旅行産業の総消費額（平成一四年度）は二一・三兆円に達し、新たに二五万人の雇用創出が期待されるといふ。国の「観光立国」政策へのシフトには、この際偏見を捨て先進諸国に倣つて、観光業を国家経済の一翼を担う位置に据えようとの意向が働いているからだと考えるのは、少々思い過ぎであろうか。

しかし、観光全般に対して決定的とは思えなかつた国家意識の中で、はたしてその観光への偏見が即座に、観光礼賛へとうまく転換出来るものであろうか。

② 非近代的な観光業の実態と労働条件

次に観光業界、とりわけ旅行業と旅館業に働く人々の厳しい労働条件と低賃金が、もし現状のまま改善されないとするなら、それ自体が「観光振興」の足枷にならないかという危惧である。実際、観光業に携わる人々の過重な労働と低賃金に対して、どうしても彼らが応分の対価を得ているようには思えない。特に、これまで全般的な低賃金雇用が、労働集約的な観光業の健全な発展を阻害してきた大きな原因のひとつになっている。これは観光業が内包する構造的弱点であり、「観光立国」最大のターゲットである外国人旅行分野に限って言えば、旅行業界には優秀な観光通訳やガイドの数が極めて少なく、教育・育成の機会もないという点にはつきり表れている。生産性が低く、労働集約的な旅行業界には、成すべきことを実行する精神的余裕、優秀な通訳やガイドの困い込みと育成システム、労働の程度に応じて当然待遇すべき制度等が整備されていないからである。優秀な通訳やガイドほど、好待遇に誘われて他の産業界へ移って行く。加えて季節跛行性が強く不安定な旅行業界には、優秀な通訳やガイドにとって応分の待遇は望めず、結局のところ旅行業界内に留まれない構図になっている。このような環境では、海外で誘客のために巨費を投じ、仮に訪日外国人が増加したとしても、外国人観光客が満足するような受け入れと十分な対応は期待出来ない。残念ながら質的にも量的にも彼らをアテンド出来る優秀なガイドが不足するという笑えない現実がある。肝心のソフトの分野がいまだに未整備状態のまま見過ごされているのである。

③日本人の排他的な外国人不信感

最大のネックは、恥ずかしいことに日本人の外国人に対する鬱積した言い知れぬ不信感、特にアジア系外国人に対する差別感であろう。最近の新聞アンケート調査によると、来日外国人が増えることを歓迎するより、彼らが引き起こすかも知れない犯罪の増加が心配であるという。これだけ国際交流が盛んになり、人材の流出入が膨大になった今日、このような狭量な排他性はまったく理解に苦しむ。国際化に逆行する、この日本人の深層心理を冷静に考えると、とても現状のまま「観光立国」を推進するのは難しいと忸怩たる思いに捉われる。学校教育の現場で「国際人」「国際親善」「国際協調」等の本質に関する日本人のありようについて、改めて第一歩から時間をかけて教育し直す必要があるのではないだろうか。少しは海外諸国の外国人に対する対応を見習って、自らの襟を正す必要があるのではないかと思う。諸外国の前向きな観光哲学や観光客への対応、特にギリシャ人の主観的で、情緒的なパフォーマンスなどを見習ってはどうか。見知らぬ人、外国人が大好きで、たった一語で「外国人好き」を表す「フィロクセノス」という言葉があるくらい、異邦人をもてなすことが好きなギリシャ人と、外国人に対して腰が引けている日本人とはまったく対極に位置している。これでは、行き着くところ「観光立国」の看板に恥じる結果になるのではないか、と心配になってくる。

五、「観光立国」への歩みと地域活性化への小さなアイデア

「社会学連携」は、これからどう「観光立国」「観光活性化」に寄与していくことが出来るだろうか。

「社会学連携」と言っても、直接的に国の政策にアプローチするわけではなく、心がけることは、現状をよく「歩いて」「学んで」観光立国をサポートするために「発表して」提言に変え、われわれに出来る手段を通して市民レベルで協力を訴えていくことである。そして、日常活動の中で地域の歴史や伝統、風習、しきたり、祭り等を紹介しながら「まちおこし」を考えることによって、地域の人々とは異なる視点から、その地域の発展性や、将来性等に知恵を出すことが出来ると思う。

われわれが個人的にも「観光立国」のために寄与出来ることは大上段に振りかぶらなくても身の回りにいくつも考えられる。それは、思いつきでも小さなアイデアでも良い。

ひとつの例として、私自身が出張ついでにぶらっと試みたフィールドワーク、九州方面へのひとり旅を綴ってみよう。

思いがけない発見であったが、JR日田彦山線の廃線目前？の列車に乗って車窓から外を眺めているだけで、私の心は充足感で満たされた。こんなに素晴らしい旅がこれほど簡単に出来るものかと心底驚いたくらいである。その日車中で、日本の原風景連続の旅、日本癒しの旅、外国人に日本の田舎を紹介するツアー等イメージやプランはひっきりなしに湧いてきた。

春の沿線風景は、すみれや蓮華草が一面に咲き、桜や桃の木には餌を啄ばむ小鳥がやって来て、その牧歌的な田園風景はまさにメルヘンの世界である。閑散とした停車場で孫と列車を見送るお年寄り、学校帰りの子どもたちが手を振るのどかな光景、田おこしする農耕牛等、そこには昔ながらの落ち着いた風景がある。瓦屋根や茅葺屋根の昔風の家屋が目に入り、しみじみ農村の美しい原風景である里山をイメージさせてくれる。そこでは、誰でもかつての懐かしい素朴な田園風景に出会うことが出来る。人々の笑顔も素敵だ。車窓からただ黙って景色を見ているだけでしみじみ心が満たされてくる。そのうえ、旅人にとってありがたいことは始発駅の城野から夜明駅まで、さらに大分まで車両は空いてゆつたりと旅を楽しめることである。夜明で久大本線へ乗り換え、天領日田林杉の産地・古都日田でしばし江戸の情緒に触れた後、湯（由）布院へ向う。話題の湯布院には観光客が溢れ、静寂な山里の温泉地というイメージはなかった。しかし、そこには「まちおこし」のためには、いま何が必要かという答えをおぼろげながら示唆してくれるヒントがあった。同時に一方で、いくつか課題もあった。東京や関西方面から湯布院へ交通アクセスのPRが充分でない。関西以遠では、博多から直通の特急「ゆふいんの森号」があまり宣伝されていないために、東京から訪れる宿泊客の中には、大分県湯布院温泉へは大分空港まで来て、そこから高い料金を払い、タクシーで直接やって来た年配の夫婦もいた。城野から、修験道場英彦山麓、夜明、日田、湯布院、大分、別府を巡って城野へ戻る一日の旅の中で、充

実感を味わった。地域の観光開発や、観光ルート、地域の宣伝について考えることもたくさんあった。こんな風に心に訴える旅なら、日本的な農村風景を見てみたいという外国人、特に若い外国人にとって、名所・史跡はなくても日本の情緒に溢れ、充分彼らの要望を満たすことが出来るのではないか。ぶらぶら旅をしているだけでも視点を定めて歩けば、普段見えないものが見えてきたり、案外旅の真髄に気がつくものである。自然に触れると発想も、プランニングも変わるものだとということを知らされた。意外に身近なところに「まちおこし」につながる素材が転がっている。そして、こんな素朴なコースをツアーに組めば、案外沿線の「まちおこし」につながるのではないかと考えてみた。

学生たちが三人の代表者を中心に、彼らの研究テーマ「まちづくり」「人づくり」「日本の心」「江戸と城」等をテーマにして、「歩く」「学ぶ」「発表する」をキーワードに活動を始めた。彼らの仕上げる作品をぜひ見てみたいと思う。「観光学」を学んでいる学生たちも自らの研究課題を大成するためには、フィールドワークは欠かすことが出来ないということとを承知している。まず「歩く」ということは、「観光学」の第一歩であり、歩いて「学ぶ」行動の過程で、実体験を重ねて自分のテーマがきちんと裏打ちされてくる筈である。そして、成果を「発表する」。そういう考えの延長線上に、きつと観光振興策へのアイデアなり、働きかけが出来るように思う。

私たちは、いまワクワクしている。夢と期待がある。次に何をやるうか、何が出来るか、と考える中で想像力を掻きたてられる。あまり気張る必要はない。社会人と学生の連携は、まだ始まったばかりである。だが、必ず何らかの形で「観光立国」への提言が出来ると思っっている。機会があれば、いずれ改めて途中経過（成果）を報告したいと思う。